

《観光・交流》

うだ
奈良県宇陀市「街なみ環境整備事業を
活用した公民協働のまちづくり活動」



奈良県宇陀市「街なみ環境整備事業を活用した公民協働のまちづくり活動」

歴史あるまちなみ資源を活かした拠点づくり、情報発信、交流のまちづくり

まちづくり活動の継続が行政の事業とつながり、地域の当たり前の風景が失われる前に、歴史・伝統の残るまちなみとして再生

奈良といえば、誰もが日本を代表する歴史のある地域と考える。まさにそうした歴史の詰まった大宇陀のまち。万葉の時代に柿本人麻呂が和歌に詠んだ「かぎろひ」の里としても知られ、古くから伊勢などと奈良の都を結ぶ街道筋にあって城下町でもあるこのまちは、その時代時代の文化を反映した建築物が今も残る。翻って現代、建物の老朽化や家主の高齢化が進み、家などを手放したり改築したりと、歴史を感じさせる味わい深い建物が次第に失われていく…。さらに町村合併があり、大宇陀のアイデンティティが



出典)宇陀市資料

弱まるのではないかと…？そんな危機感の中で、有志が始めた歴史的な資源を生かしたまちづくりの活動が、少しずつ広がりを見せ、地域の歴史や景観に興味を示す地域外の人たちが訪れるようになった。そして住民の想いに気づいた行政が、まちなみを残すための国の制度を紹介し、公民が連携して制度活用に必要な取り組みを進めていった。

住民すべてがまちなみに関心を持ったわけではない、むしろあたりまえの風景としてしか見ていなかった人が多いなかで、どのように地区指定の合意を取り付けていったのか？また選定を受けることがきわめて難しい重要伝統的建造物群保存地区の指定を、どうやってこれほど早く受けられたのか？旧大宇陀町長の動きも含め、小さなまちならではの顔の見える関係が、迅速な事業遂行につながった事例である。

取り組み概要

取り組みの目的

様々な時代背景を反映した特徴的な建築物が減りつつあるなかで、歴史を感じられるまちなみを残し、地域の活力づくりにつなげていくため、街なみ環境整備事業などを活用する。

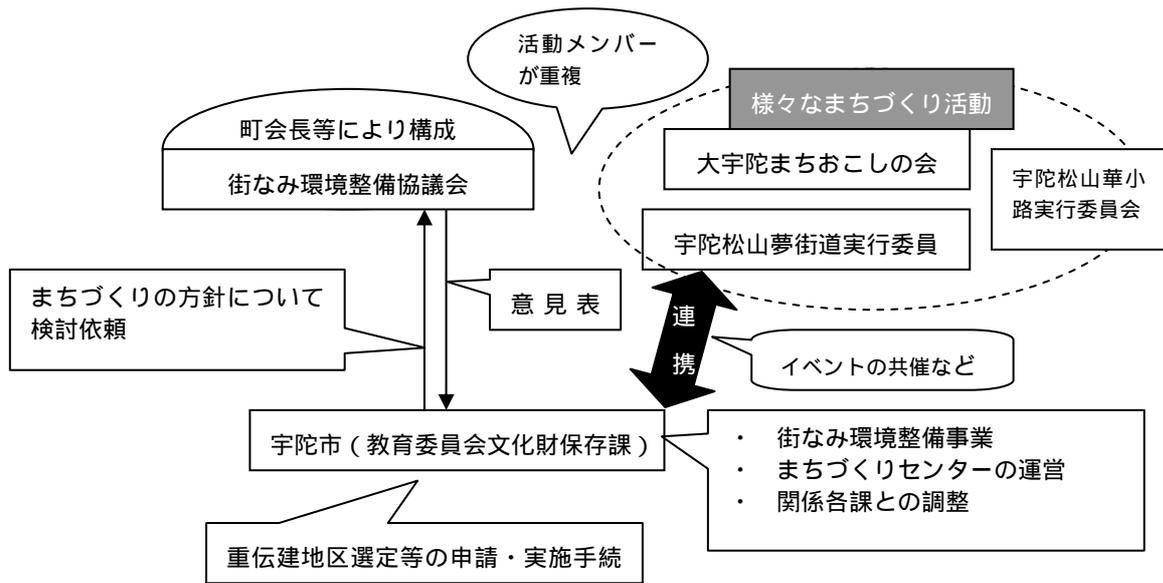
取り組みの内容

- ・街なみ環境整備事業の活用によるまちづくり拠点の確保、道路等の整備
- ・まちづくり拠点「千軒舎」の運営（宇陀市）
- ・重要伝統的建造物群保存地区の選定獲得とそれに基づく建築物の整備

取り組み主体

- ・街なみ環境整備協議会
- ・大宇陀まちおこしの会
- ・宇陀松山夢街道実行委員会等のまちづくり活動団体
- ・宇陀市教育委員会文化財保存課

取り組み体制



取り組みのポイント

1. 公民の機動的な連携

地域のまちづくりの動きを行政がいち早く捉え、制度の適用可否判断や申請手続き支援、補助金の活用など行政が出来る支援と、市民がした方が効果的な取り組みを組み合わせる具体的な形に整えていく。

2. 地域の資源であるという認識を地域で共有する働き掛け

地域の中に居るだけではなかなか分からない地域の良さを、地域住民が認識し共有できるよう、住民が楽しく参加できる地域資源を活用したイベントを、思いついた人が企画し、共感できる人たちがその都度出来る範囲で作業分担する。

3. 人的なネットワークを活用し、物件に関する情報を早めに共有

建物などの物件は個人所有のため、貴重な資源が滅失や改築などをされてしまう前に、所有者に意図や制度内容を説明してまちなみ整備につながるようにするには、人的なネットワークを活用して出来るだけ早く情報をキャッチしていくことが重要となる。

取り組みによる成果

- ・ 歴史あるまちなみ保存が実現。地域の貴重な資源であり地域の誇りとの意識普及
- ・ 来訪者の増加により、多くの交流機会の増加

今後の展望

- ・ 街なみ環境整備事業として10年という区切りを迎え、事業内容の見直しなどについて検討
- ・ 市内にあるほかの資源と連携し、より多くの人を地域に回遊できる仕掛けの検討
- ・ 空き家の活用ができる仕組みの構築

宇陀市の概況

人口は減少、一次産業の比率が高く、農林業が盛ん

宇陀市は奈良県の北東部に位置し、四方を山に囲まれた大和高原に位置する高原都市である。

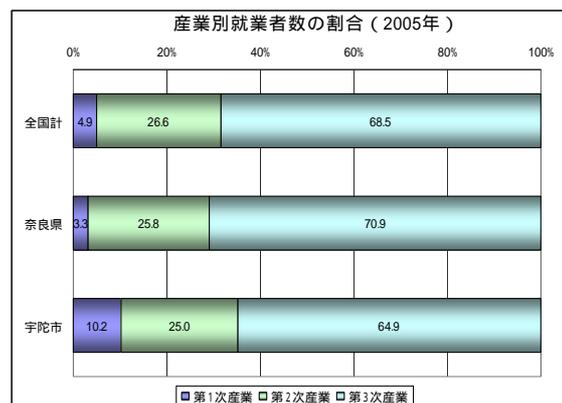
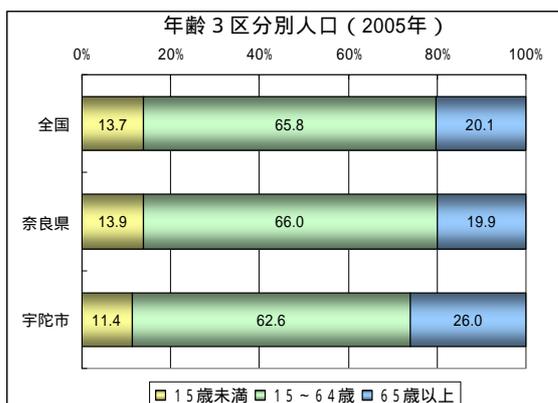
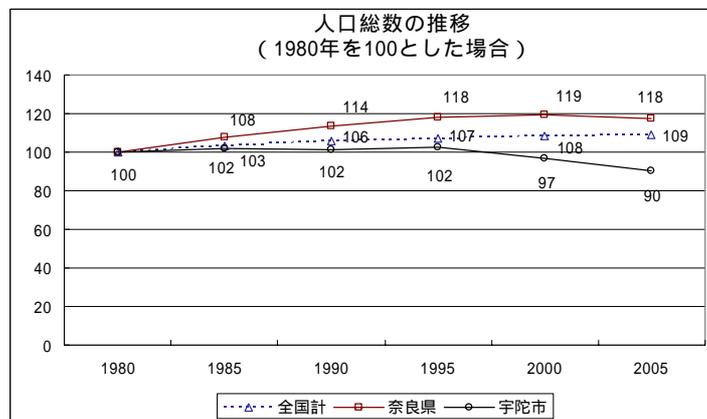
宇陀市の住民基本台帳ベースでの人口は、35,551人（2010年12月1日現在）である。全国等との比較のために2005年の国勢調査をみると、1980年を100とした場合の推移では、全国がほぼ横ばい、奈良県は微減であるのに対し、宇陀市は1割減となっている。また、高齢化率は、全国平均とほぼ同じである奈良県平均より6ポイント上回っている。産業構造では、第1次産業の就業者が1割を占め、農林業が盛んな市である。

近畿日本鉄道の大阪線が通っており、榛原駅、“女人高野”で有名な室生寺への最寄り駅である室生口大野駅、三本松駅がある。榛原駅周辺が市の中心となっているが、市域は広く、新興住宅地から山間部に点在する集落など、様々な顔を持つ。

万葉集にも出てくる歴史のまち

宇陀市は、2006年1月1日に旧大宇陀町・旧菟田野町・旧榛原町・旧室生村が合併して誕生した。吉野葛や食肉用の宇陀牛が有名であり、毛皮革産業の集積もある。また歴史が古いまちでもある。「宇陀」「榛原」という地名は万葉の時代から存在し、万葉歌人・柿本人麻呂が現在の大宇陀の阿騎野（奈良時代の宮廷の御狩り場）で「東の野にかぎろひ¹の立つ見へて返り見すれば月傾きぬ」という秀歌を詠んだことは有名であり、この「かぎろひ」を見に多くの人が訪れる。また“お伊勢さん（伊勢神宮）”への道である伊勢街道があり、宿場町としても栄えた。

1 諸説あるが、厳冬のよく晴れた日の日の出1時間ほど前に見られる最初の陽光という説が有力で、山にかかった曙の光が美しい。気象条件が整わないと見る事が出来ず、観測するために何度も通う人が少なくない。



出典)総務省統計局:国勢調査

合併前のデータは大宇陀町・菟田野町・榛原町・室生村の合計値

取り組みに至る経緯

城下町、宿場町としての歴史

今回の舞台となる松山地区は、宇陀川沿いに広がる南北 1.8Km、東西 0.3Km のエリアである。戦国時代に「宇陀三将」と称された秋山氏の本拠地、秋山城の城下町として始まった経緯がある。その後、豊臣家配下の大名によって城の大改修と城下町の拡大整備が行われ、町名も松山町へと変わる。現在の松山地区は、このときの城下町の町割りを骨格にしている。その後の統治は、織田家、そして幕府領となっていった。

また、松山地区は伊勢本街道や青越え伊勢街道（初瀬街道）と高見越え伊勢街道（和歌山街道）を南北につなぐ交通の要衝となっており、伊勢や熊野から魚や塩、また宇陀松山からは宇陀紙や葛・油・薬などを運ぶ流通の拠点となって、「宇陀千軒」「松山千軒」と呼ばれるほどの賑わいで江戸時代から活況を呈していた。近代に入ってから宇陀郡役所や裁判所が置かれ、政治・経済の

中心地として栄えた。

地方の一地域でありながら、中央政府とのつながりがある土地柄であり、長い歴史の中で様々な文化の影響をうけてまちなみが形成されていった。松山地区は、一時代に一気に形成されたまちではなく、時代時代の影響を受けながら積み上がってきたことから、家毎にそれぞれ異なる時代の特徴を持ち、まちなみを眺め歩くだけでも町家の向こうの「時代」を垣間見ることが出来るという特徴がある。地区の入り口に位置する史跡・松山西口関門や江戸末期の薬問屋を利用した歴史文化館など歴史的な建物やまちなみが今も約 200 軒残る。

街なみ環境整備事業の活用へ

しかしこれらの資源を、初めからまちづくりに活かそうという動きがあったわけではない。どちらかといえば、住民はまちなみに余り関心をもっていなかったといっていよう。

旧大宇陀町の歴史的資源といえば「かぎろひ」であり、全国からその自然現象を見るために旧大



出典) 宇陀市資料

< 宇陀市へのアクセス >
 東京から
 京都駅まで新幹線で約 2 時間 20 分
 京都駅から榛原駅まで電車で約 1 時間 20 分
 大阪から
 大阪駅から榛原駅まで電車で約 1 時間



出典) 宇陀市 HP <http://aknv.city.uda.nara.jp/matuyama/access.html> (2011/03/25 参照)

宇陀町に人が集まって来た。地域でも、「かぎろひを観る会」を立ちあげ、「かぎろひ」を見に来る人たちをもてなす企画などをするようになっていった。残念なことに、自然現象であるため必ず見ることが出来るものではなく、「かぎろひ」を見ることが出来ない年が長く続き、5年ほど前から自然と来訪者が減っている。

しかしこうした活動は、歴史的な資産を活用していくという事に、少なからずの住民が関心を寄せる契機となった。年に数回しか見られないような自然現象が、いつもと違った魅力のあるまちの姿を見せてくれる。活動の中心メンバーの一人であり、大宇陀まちおこしの会の事務局長でもある裏宗久氏は、『いつもあって当たり前のもので、例えば古いまちなみとか生活の中にあるもので、住んでいる人には貴重という意識がなかったものを、どのように伝えれば大事なものだとかわかってもらえるか、考えるようになりました』という。

今は“宇陀松山夢街道”という名称で、「大宇陀まちおこしの会」や「かぎろひを観る会」のメンバーにより宇陀松山夢街道実行委員会が立ち

上がり、毎年恒例事業として実施している。

こうした活動が行政に届いた。旧大宇陀町長の芳岡一夫氏は、自ら指示して「まちづくり懇談会」という諮問機関を作り、その2年後に街なみ環境整備事業に取り組むこととなった。「松山地区街なみ議会」が設置され、松山地区における各種整備事業において歴史的環境及び生活の利便性の観点を踏まえ、松山地区の歴史的まちなみとしての質の向上を図るために必要な事項について住民とともに協議する場が設けられた。そして、歴史的景観などをまちづくりに生かす建設省（現国土交通省）の「街なみ環境整備事業」の指定を申請したところ、2000年12月に認められ、いよいよ具体的な取り組みが始まった。

まずは、西口関門周辺に二か所のミニ公園を整備し、そのうち老朽化した町家の補修に対する国と町の補助制度の活用や、使われなくなった古い商家の活用、川沿いの遊歩道整備などを進めることとした。



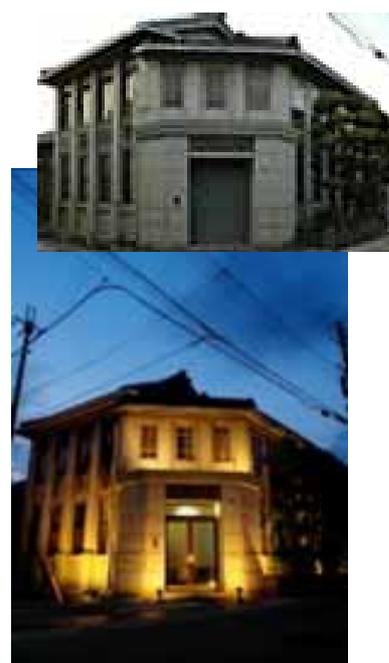
春日神社への参道に手作り行灯
幻想的である



住民有志が出店している屋台



まちづくりセンターでの「昔のお仕事～綿の花からの加工」展示と実演



夢街道 2010
旧福田医院のライトアップ

出典) 宇陀市資料



大宇陀まちおこしの会事務局長

うら むねひろ
裏 宗久 氏



街なみ環境整備協議会の監査でもある。アイデアマンで行動力があり、若手の一人として様々なまちおこしの仕掛けを実行。

「色んな人に力と知恵を借りて運営していくことが大切」

Q. 裏さんはこの地域にお住まいですか？

そうです。祖父が大工をしております、たくさんの家を世話させていただきました。父の代から大工道具を商うようになりそれを継いでいますが、そのようなこともあって、建物に関心があり、このまちなみがどうなっていくか行方が気になっていました。

Q. 松山地区のライトアップを企画されたということですが？

1996年、中央商店街でそれまで夏にカラオケ大会などをやっていた。そのとき私も役員になったのですが、何かもっと面白いことはないかと考えていました。その頃「かぎろひを観る会」にも参加していたのですが、写真家が来て撮影されるとその辺の山などを撮っても季節とか時間とかでずいぶん魅力的な風景に見えることを知りました。それで古い建物に光をあてたらどのように見えるのだろうかというライトアップを試みました。そのときは1回だけということで終わったのですが、その後2000年から桜井JCや宇陀商工会の事業として取り組み、以降実行委員会を組織して実施しています。1回目の時に、おじいさんがお孫さんの手を引いてまちなみを歩いてくれたのですが、その子どもさんが「よその町に来たみたいだね、きれいだね」と言ってくれたのが嬉しかったものです。

Q. ライトアップをする際に工夫されていることはありますか？

どうすればいつもとは違うまちなみを見せられるかということ、みんなで考えています。格子の中から光を当てたり、犬矢来の中に光を入れたり、路地に行灯を並べてみたりして、光の演出をしています。それぞれのお宅の協力を得ていますが、お礼に写真を額に入れてお返ししています。住んでおられる方も、写真を玄関に飾ってくれています。古い家は暗くて、寒くて、汚くてマイナスのイメージがありますが、このような古い家に住めるのはステータスというか誇りに思えるようになればと考えて、お礼として写真を額に入れてお渡ししているのです。

Q. イベントをする際に気をつけていることはありますか？

竹の筒の中にろうそくを入れて、家の端に灯していただくなど、自治会が協力してくれています。小学校の先生が子どもたちのスケッチを貸してくれ、商店のウィンドウに飾り、展覧会などの取り組みもしました。賑わいを作り出すということで地域の人たちが模擬店も出しています。ライトアップを長く続けていくためには、特定の人達だけではなく、色んな人に力と知恵を借りて運営していくことが必要になってきます。

松山地区まちづくりセンターの開設

街なみ環境整備事業を活用したことで、国交省を通じて事業内容について情報発信がされていた。その結果、学術研究や散策などでの来訪者が増えていった。大きな観光資源となると考えた町は、歴史的まちなみを保存するため、国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を申請することとした。

旧大宇陀町教育委員会の町なみ保存整備室が中心となって、手続きを進めていった。町が保存地区指定を想定しているのは、旧城下町の旧松山町に含まれる大字18か所。計約17ヘクタールの区域内の江戸時代後半から昭和初期の建築の商家などが対象となる。旧大宇陀町は、対象となる約300世帯への説明を行い、まちなみ保存のための条例制定、対象民家、保存方法をどうするか、具体的な方針の審議などを行った。当初いろいろな制約ができて、住みづらくなるのでは？という住民からの不安も寄せられたが、「外観の変更や色々な手続きは必要になるが、内装は自由に生活に支障がない」と説明することで了解を得られた。

2003年、明治初期に建てられた「旧内藤家」の伝統的町家を改修、大宇陀町の歴史的まちなみ保存の拠点「松山地区まちづくりセンター」を開設した。ここでも公民連携の動きがある。たまたま建物の持ち主がお盆休みの時に荷物を整理されていて、「家を潰そうと思っています。隣の借家も返してもらって全部更地にしたい。」と話されたのを、松山地区街なみ環境整備協議会のメンバーが聞きつけ、その方に少し待ってもらおうようお願いし、当時の助役に、「所有者の方に権利だけ譲ってもらって、街なみ環境整備事業で改修できないか」と話したところ、町が話をまとめて動いた。建物の持ち主は、まちづくりに役立てて欲しいと建物を同町に寄贈することにされた。協議会としてどんなことに利用するかの議論を重ね、結果としてまちづくりセンターとして再生されたのである。

2005年にまちづくりセンターが完成し、教育委員会の町なみ保存整備室（当時、現文化財保存課）がセンター内に移転し、重要伝統的建造物群保存地区の申請をするために必要な建造物等の



城下町の入り口となる西口関門。この周辺が整備された。



内部にある地域資源の写真展示コーナー



松山地区まちづくりセンター「千軒舎」の入り口

出典) 宇陀市資料

修理・修景の基準作りなどの準備作業を本格的に進めることとなった。この仕事を担当する職員が文化財保存課の森本陽子主査である。

専門知識のある職員採用で、重伝建選定に向けてスピードアップ

芳岡前町長は「この事業を進めて行くには専門家が必要である」と考え、旧大宇陀町として職員の公募を行った。1989年頃から、東京藝術大学名誉教授の前野まさる氏が、学生を連れて松山地区の古民家の寸法を測り、図面に上げる実測実習をしに来られており、その時に裏氏が学生達の泊まりのお世話などをしていた。裏氏が、先生の助手を勤めている人に「専門職の募集があるのだが、誰か受けに来てくれないだろうか」と話したところ、彼女が手を上げてくれたのである。

大学・大学院と、文化財保存や建造物の調査などを学んできた森本氏は、町なみ保存整備室の一員として合意形成、保存計画の作成等に当たった。

重要伝統的建造物群保存地区の選定へ

幾つもの準備を重ね、旧大宇陀町は2004年度には「大宇陀町伝統的建造物群保存地区保存条例」を制定した。

そして2006年7月、松山地区の旧城下町の部分、東西約340メートル、南北約1470メートルにわたる約17ヘクタールが、県内2例目の国の重要伝統的建造物群（重伝建）保存地区に選定されることが決まった。

松山地区街なみ環境整備協議会の副会長である森本光俊氏は、「本人を前にして持ち上げるのもおかしいですが、森本さんがいなければ、重伝建に選定されていなかったと思います。仮にできたとしても、かなり遅かったように思います。」と話す。



宇陀市教育委員会事務局
文化財保存課主査

森本 陽子 氏



大学・大学院で文化財建造物保存などの研究をしてきた、宇陀市職員。

「『ここに就職できたら幸せだな』と思った」

Q. 森本さんは大宇陀のご出身ですか？

いいえ。職員募集に応募するとき、はじめて大宇陀に来ました。

Q. この地に就職を決められたのは何が決め手だったのでしょうか？

当初は別のところに就職を希望していましたが、そちらの試験を受ける前にこの話がありました。実際に大宇陀町に来た時にお城のある山に登った。下りてきて宇陀松山のまちなみを見てる時に、「ここに就職できたら幸せだな」と思いました。このまちなみに惚れ込んだということでしょうか。

Q. どういった点に惚れ込んだのですか？

まちなみもそうですし、ここに住んでいる人達の、昔から変わらない暮らし方にも大きな魅力を感じました。面接の時に、面接官から「ここで住むつもりはあるか」と聞かれ、空き家に住みたいと答えました。実際、澤井輝雄さわいてるお松山地区街なみ環境整備協議会会長やいろんな方のご尽力で話が上手くつながり、なかなか物件が出てこない町家を購入し、そこに暮らしています。

現在の取り組み

松山地区まちづくりセンターを中心とする まちづくり支援

現在センターでは、宇陀松山城跡の整備、また街なみ環境整備事業として位置づけられた道路整備や公共空間の整備、まちなみ保存事業として、この地区の中での家の修理や修繕をする際の補助金手続きの相談、実際の現場の確認等をしている。

また、まちづくりセンターは貸し館機能もあり、土日は観光ボランティアガイドの経験者に管理をしてもらっているため、土日は観光情報の発信に重きを置いた運営をしている。また、まちづくりセンターは、まちなみ保存のモデルハウスにする方針で改修されており、伝建地区の改修モデルハウスという役割も持っていて、改修の相談時に実例として細部まで見てもらうことがある。



みんなで制作中。女性の参加者が多い。

宇陀松山華小路の取り組み

文化財保護課の森本氏が一市民として今取り組んでいるのは「宇陀松山華小路」である。宇陀市はダリアの球根が特産で、その生産の際にダリアの花は摘まれる。これをもって歴史的なまちなみの路地に敷き詰めようという取り組みを森本氏が発案した。2009年から始め、2010年と2回開催している。このイベントの特徴は女性の参加者がかなり多いことである。実行委員はたった4名なので、実際の段取りなどはとても大変だが、女性は家のこともあり動ける時間が限られているため、何とかお母さんたちに出てきて欲しいという思いもあってはじめた企画である。

また、行政主導の事業ばかりをやって、補助金が無くなったら止めようというのは良くないことなので、何も無いところから取り組みを始めて、行政以外からお金を募ることも試みながら市民が主体となる楽しい企画をやってみたかったと森本氏は言う。

こうした趣旨に賛同し、松山地区街なみ環境整備協議会の方から、大変であれば手伝おう、という趣旨の言葉が寄せられており、ここにも新たな連携に発展する兆しがある。

宇陀松山華小路の完成した路地。
八咫烏を描いたもの。



出典) 宇陀市資料

取り組みのポイント

公民の機動的な密な連携（地域の声をプロジェクト化）

これらの活動は、地域の理解を十分得ることなく進めてしまいがちな行政からの事業立案ではなく、有志ではあるが、地元の希望によって実現させたプロジェクトであった。まちなみの貴重さ・大切さに住民が気づくような働きかけを、有志の市民が仕掛けていく一方で、行政の長までもが積極的に動き、専門知識のある職員も新たに雇用するなど、行政は、制度利用や条例制定、地区指定など市民だけでは対応が困難なことに対応した。街なみ環境整備事業を導入するにあたり、当時の必要要件として街づくり協定を結ぶ必要があった。つまり、住民の了解（押印）を得ることがポイントであった。この点も、説明は行政が行い、街なみ環境整備協議会のメンバーが一軒一軒同意を求めて回った。協議会メンバーは自治会長経験者が多く、地域から信頼を得ている人たち

であり、地元の人にも協力しやすい。このときの協定を結ぶための同意の判は、目標 6 割のところ、8 割集まった。それぞれの役割分担が互いに共有され、機動的に連携できたことが成功のポイントである。

地域の資源であるという認識を地域で共有する働き掛け

地域の中に居るだけではなかなか分からない地域の良さを、地域住民が認識し共有することから、一人一人が主人公として意識を持ち、まちづくりが動き出す。そのために、住民が楽しく参加できる地域資源を活用したイベントが、この松山地区を中心に実行されてきた。

この事例のおもしろいところは、一つのまちづくり団体が前面に出てきて推進するのではなく、何かアイデアを持った人が、やってみようと思い自ら動けば、その趣旨に賛同して地域の中でも手伝う人が現れたり、他のグループや地域外の



それぞれに異なる特徴をもつ町家

昔の街なみが掲載された雑誌



出典) 宇陀市資料

人たちとのネットワークができて一緒に取り組んでみたりして、松山地区を舞台にいろいろな切り口での活動が展開されている点である。そのため、同じ人が名を連ねてもいるが、それぞれ違うメンバーも加わっている協議会、実行委員会の類が多い。各活動をつなぐ人が必ずいることから、他の活動情報が別の活動に伝わりやすく、形だけではないネットワークが機能しているように思う。

人的なネットワークを活用し、物件に関する情報を早めに共有

建物などの物件は個人所有のため、貴重な資源であっても、滅失や改築などは他人が知らない間に行われるのが普通である。立派な建物で、地域の人たちの中にもったいないという気持ちが芽生えていったとしても、他人の家であり、他人の所有物についてとやかく言うのは嫌われることなので、誰も何も言わないものである。街なみ環境整備協議会という形があって始めて口を出ることができる。そして、所有者に意図や制度内容を説明してまちなみ整備につながるようするには、人的なネットワークを活用して出来るだけ早く情報をキャッチしていくことが重要となる。そして、耳にした情報をそのままにせず、こまめにフォローしていったことが、物件の保存やまちなみにあった改修につながる事例を増やすことができたポイントであろう。

取り組みの成果

歴史あるまちなみ保存の実現と地域の特性の確立

現在、地区内には保存物件数が¹131件、工作物²が90件、環境物件が³28件ある。それらを回遊するためのパンフレットや歴史や建物の由来を紹介するホームページなども充実されている。合併し、宇陀市となった今、大きな観光スポットであり、大宇陀の歴史を今に伝える貴重な資源となっている。

また、街なみ環境整備事業を活用して、まちなみ景観に適した道路の舗装整備を進めている。

交流機会の増加

現在、地域外から年間1万2千から3千人の来訪者がある。観光協会に属する観光ボランティアが来訪者への説明を担うことで、交流の機会が増えると共に、ボランティアをしている市民のやりがいとなっている。

今後の展望

街なみ環境整備事業として一つの区切りを迎えて

松山地区街なみ環境整備事業はスタートしてから10年が経過している。実は、当初の事業計画の30%しか達成できていない。街なみ環境整備事業ができた当初の計画と財政状況が変わっているため、事業がほとんど進んでいない状態なのである。引き続き、この事業を受けたいと申請している。10年経て、街なみ環境整備事業は、どちらかと言えば公共基盤を整備する事業、重伝

2 土塀、板塀、石垣、玉垣、石段、石碑、石柱、小祠、鳥居、狛犬、燈籠、排水路、橋等を指す

3 保存地区の伝統的建造物と一体となって、歴史的風致の維持に大きく寄与しているとして特定された樹木・庭園・生垣・土地の形質等

建は、個人宅で個人がする事業という色分けができてきていることから、街なみ環境整備事業では今後道路の整備を重点的に取り組んでいく方針である。施設の整備計画を見直してどんなものが必要なのか、どのようにまちのデザインをしていくのか、検討が必要であり、そのために事業を中心として皆が思いを話し合う場を提供するのが、街なみ環境整備事業の一つの役割ではないかと裏氏はいう。「町の人意識も高くなってきていると感じていますし、今まで話し合う場が足りなかったと感じておりますので、協議会が議論を深めていく場になればよいと思っています」。一つの区切りを迎えた今、次の展開に向けて新たな飛躍を期待したい。

もっと回遊性が高まるまちづくりをしたい

松山地区まちづくりセンターの近くには「道の駅宇陀路大宇陀」がある。ここは年間40万人も来訪者がある。ここに来る人を、松山地区やそのほか宇陀市の資源となっている場所にも回遊してもらえないだろうか、と協議会の澤井会長は話す。

空き家を活かす仕組みづくりを！

“まちなみを維持するには人が住み続けることが必要だ”として、地元は、地区に散在する空き家を減らすための対策を模索した。古い町家に住みたいという希望者は少なくないが、空き家の持ち主とつなぐ仕組みがない。空き家率は1割程度で、借りたいという希望はあっても、「信頼のおける人でないと貸せない」と二の足を踏む所有者の事情もあるし、家の大きさや修繕などの必要性など条件がそれぞれに異なり、なかなかうまくマッチングができない。宇陀市では空き家対策のための課が新設され、これから仕組みなどの検討を進めていくこととなっている。



松山地区街なみ環境整備協議会
会長

さわい てるお
澤井 輝雄 氏



伝建地区指定を受けることは、世界に情報発信することになると語る、地域からの信頼厚い長老格。

「しっかりしたまちづくりが必要」

Q. 道の駅との連携など、どのようにお考えですか？

道の駅はまちを訪れた人に宇陀市を紹介する場所。でもただそれだけでよいとは思いません。ここに来る人たちは何を求めているのか？手作りのおまんじゅう屋とかお豆腐屋とか、酒蔵とかがどこにあるのか知りたいのではないかと。

40万の利用者がまちの中に流れていく方法を考えるべきだと思います。今は10分の1も流れていない。そこを私たちがしっかりと考えて、工夫した看板づくりをすることも、街なみ環境整備事業の一つになると思います。

どういう仕掛けが必要なのか、今までも頑張ってきたのだから、これからはもしっかりやっつけていかないといけないと思います。